

A photograph of a pond with a reflection of a tree and sky in the water. The water is a deep blue, and the reflection is clear and detailed. The tree has green leaves and a brown trunk. The sky is a pale blue with some white clouds. The text is overlaid on the image in white.

ねずみ魚

(中)

カナタ・ムメイ

次に先ほどの表情をしたら、紳士的に女と関係を持とうと考えた。その読みは甘かったらしく、先走った、しっぺ返しか、女は傍には寄らず、庭に出て行った。男もついて行った。

庭には人口の滝があり、犬小屋があった。二人は雨にあたって犬小屋を見ていた。犬の名は訊かなかった。犬は後足の間から赤紫のペニスをだらりと下げてそれを舐めていた。

女は男の顔を覗き込んだ…男は視線をずらした。そして、女の顔と合った。男は、発情期の話をし始めた、しかし女は、いたずらな笑みを浮かべ、男を挑発した。

「こういうことは生理的に考えるべきさ、きみは歯医者だ、そういうことには慣れているだろう、俺はここに永くいたようだ、もう帰るよ、駅はどこかね」と、男は少し不機嫌になって言ったが、その裏には、女と関係を持ち、あの脹脛を嫌というほど味わいたい気持ちで疼いていた。

「きれいな…わたしのこと…」

「好き嫌いの問題じゃない、だが、そう、リードされると、調子がおかしくなりそうで…」

「きれい？」

「きみのことか？」

「そうじゃなくて…」

雨音は一段と増し、女の言っていることは聞こえなかったが、男は女を抱きしめた。

傷を負った鳩を掌で保温していた少年時代の映像が一瞬浮かんだ。

そして二人は庭先で関係を持った。

「雨に打たれるのは好きなの…と耳元で女は囁いた。昔ね、診察していたときに失神しちゃった患者さんがいたの、そうしたら、…硬くなって…ズボンが持ち上がって…だから、…わたし、こうしているの好き…誰も見ていないわ…もうおしまいなの？…帰るの？」

女は雨ですっかり濡れた髪をかきあげ、服を着始めた。男の部分は、しばらく上に反っていたが、次第に、落下していった…女は余韻を楽しんでいた。男は女の踵に舌を滑らせ、脹脛からひざの裏までを丁寧に滑らせた。

「ねえ、どうして、そう足を楽しむのかしら、じれったいの嫌い」

「きみの足になぜか惹かれたんだ…どうしてか分からない。足に執着するのは…」

小学校に通っていた頃だったのだろうか、授業中に母が学校にやってきた。母の顔は悲しみで暗く、寂しそう、その落ち込みは激しく、その顔を見たときに俺は分かった。静岡の療養所に祖母がいた。祖母はその当時では、いい薬がなく苦しんでガンで死を迎えようとしていた。母はよく毎週日曜日になると、列車で療養所まで行った。俺も連れて行ってもらったことがあったが、覚えているのは、小便に行きたくて、駅でプラットフォームから小便をしたこと、連結器に異常なほど見惚れていたこと、それから、祖母の病室の臭いが酷かったこと、そして祖母の個室にあったテレビでは枯葉剤の奇形児のドキュメントをしていたことだ。祖母は痛い、痛いと言っているか、薬で恍惚としているかで、もう死ぬのは誰の目にも明らかだった。それから、病院を後にして、確か夏場だったか、五月のひどく暑かった日のいずれかだろう、鄙びた農家の母屋の庭先で女がしゃがんで子供に水浴びをさせていた。子供を母は見て微笑ましい表情をしていたのだろう。しかし、俺はしゃがんだ女の短いスカートから覗く薄いブラウンの色をしたストッキングに包まれた、M字になった太ももと脹脛に、視線が焼け付き、その光景が、その後の女の脚に執着する原風景だったのだろう。

祖母が死にかけていること、その祖母の病室の嫌な臭いがなぜかその光景を強化したようだった。俺は時ある毎にその光景を飽きるほど記憶の中で再現していた。そして祖母は死を迎え、母が学校にやってきたのであった。母に連れられて、俺は通夜に出席した。そこでも喪服から覗く足にやけに執着した。このことは普通であろう。誰しもそんな性に関するきっかけらしきものの一つや二つはあることだろう。ただ、俺の場合女の乳房や性器にはたいした興奮を示さず、足だけで興奮してしまい、その後の女との関係でも足に拘り、どんなきれいな女でも足に目がいき、そこで品定めをしてしまった。

「すっかり冷えっちゃったじゃない、私先にシャワーを浴びるわ…」と女は言い、庭を後にした。男は女の後を視線で追った。

庭先に面した茶色の木の艶やかな廊下に女の足跡が湿って続いていた。庭にいる男は、しばらく雨に打たれていた。というのも庭の奥には透明のガラスを嵌めてある離れがあり、そこに老婆が庭にいる男を眺めていたのであったからだ。

その老婆は顔をガラスに押し当てて鼻先のところが、息で、曇ったり、透明になったりして、それが興奮を意味するのか、怒りを意味するのか、無表情のため判断がつかかねていた。老婆は醜く曲がった指先をガラスに押し当て何か文字を書いていたが、水蒸気で曇ったガラスでないために文字は分からなかった。ただ、その老婆が女の身内の者なのか知りたく、また男と関係を結んでいた庭の光景を見てしまったのかを知りたかった。そこで男は離れに行ってみることにした。老婆から何か聞きだし、場合によっては脅かしてせめて関係を持ったことについて公言しないことを誓わせようとした。

離れのドアをロックした。すると、部屋から意外と鮮明で、しっかりとした老婆の声が聞こえてきた。「お入んなさいな、誰か知らんがね、まさか私をも襲おうという魂胆じゃないだろうね、私はもうお婆さんだからね、お婆さんを襲うなどといったら、それこそお化けだからね、…とにかくお入んなさいな、ドアは鍵なぞかかたらんよ」

老婆は夏だというのにストーブをつけていた。そして、男がドアを静かに開けると、ちゃぶ台を前に正座していた。長袖で、紺の模様の入った割烹着を着ていた。

「ばあさん暑すぎやしまいかい？」

男は、額の汗をぬぐって、スウェットの上着を脱ぎ、Tシャツ姿になった。

「お母さんかい？あの女の」

口をへの字型にして目をつむっている奇妙な表情の老婆に言った。

「なんだい、お母さんじゃまずいことでもあの女にしたのかい？」

「見ていたとしたら、黙って知らない振りをしてくれないかい」

「嫌だね、これだけを言っておきたいね、私はあの女のかかあでもなきや親戚でもないさ、だがね、白の服を着た女と、寝巻きを着たようなおまえさんが、乳練り合っている姿はとても滑稽だったね。なんだね、あの腰つきは、下手だね。おまえさんは女を楽しませたことはあるのかい？ひどくぶきちょそうだね、あの女は、色情狂なのさ、私は懇々と説教をしたって、少しも聴いたためしがない、子宮の話し、命の話し、恋愛の話し、私のようにお婆さんともなりゃ若い子なぞ聴くわけがないがね、懇々と説教したもんさ…あの女はね、最初は歯科医のお嬢様だったんだ、なに不自由なく育ったんだがね、見たんだよ、まだ小さな子供のころにあそこを擦っているのを、それを注意したんだ、ばい菌がつくからってね、そうしたことを旦那さまに伝えたら、旦那さまが怒って、私を叱ったんだ、おまえが教えたんだらうってね、

私はいいえとしか言えなかったんだがね、お暇を出されちゃって、私は一人じゃ、どうしようもなかったんだ、田舎は遠かったからね、そうして、病院の家政婦をしたりしてそのことを忘れようとしていた矢先に旦那さまが亡くなったっていう知らせがきたんだ、それは不思議だったんだよ、なんでかって、私の居所を知っているということがだよ、かなり離れてはいたんだ、奥様はその頃元気だったんだ、そしてお嬢様が跡を受け継ぐって話になって、私は何も知らない奥様の頼みで、ここに住み込むことになったんだ。お嬢様はそれは親の七光りもあってか、最初は順調だったんだ、だがね、歯科大学に行っていたときに、悪党がお嬢様に付きまとい始めて、それから、なに不自由なく育ったお嬢様はだんだん変な癖がついてしまってそれが普通で…あとのことは、私はすべて見てきたんだ、その悪党はきちんと大学を出て行ったんだが、残したもの、お嬢様に残していった爪あとはそれは気の毒なくらいお嬢様に沁み込んでしまった、私は、それを何度も何度も、くどいほど説明しても、お嬢様は聞いちゃくれなかった…それからというもの、もうひどいものさ、とっかえひっかえで、患者にまで手を出して、全てあの悪党のせいなのさ、普通の身なり、顔立ちした悪党のせいさ…」

老婆は、話し終わると、目を閉じて上を向いて、念仏のようなものを唱え始めた。そして、男がなぜ夏なのにストーブをつけて、その上、厚着をしているのを不思議に思って、滴る汗を拭きながら、女のことをもう少し聞き出そうとした。老婆はしばらく念仏のようなものを唱えたかと思うと話し始めた。

「それで、悪党はどっかに行っちゃったんだがね、お嬢様は結婚もせず、町に出歩いてはおまえさんのような駄目な人間を連れてきては母屋やおまえさんのように庭で交接したんさ、ただ、それだけで終わらないんだ、ひどいことにこの歯医者さんがすぐにやらせてくれるという評判がたちはじめ、それ目当てにまだニキビのある中高生まで来て、噂はものすごく広まった。強姦もされたんだ。お嬢様は私に泣きついてきたね。お嬢様は、自分がふしだからいけないんだ、って泣き泣き言っていたがね、しばらくすると私にだよ、この私に強姦されたときのことを話し始めたんだ。聞くまいとして、お嬢様に、もうお忘れなさい、といていたにもかかわらず、お嬢様はみほとって何？っていうんだ、だからそういうことは忘れなさいといったんだ、そうしたらお嬢様があれのことかもしれない、って泣き顔で言うんだ、私は黙って聞いていたんだがね、小さな声で独り言のように言うんだ、そのみほとに穴を開けてピアスするぞ、ここには都合よくドリルがあるからな、って声色を使って泣き顔で言うんだ、それを聞いて私は警察に相談したほうがいいですよ、って言ったんだ、でも翌日にはもう忘れてしまったらしく、高校生の男の子を母屋に連れ込んでいたさ」と、言って、ちゃぶ台の上に俯いて寝息を立てて、それがいびきになって寝込んでしまった。

「ばあさん、そんな毒々しい話ほんとにかよ」

男はそう言ったが、老婆はひどいいびきをかいて眠ったままだった。

ここはやたらに暑い、どうかしている、この老婆の言っていることは自分自身のことかもしれない。そうだ、多分そうだ。

男はそんな老婆のいいかげんな作り話など信用すまいと思っていると、老婆は、いびきを中断し、俯いたまま言った。

「もって半年、ほんとにおまえは間抜けだね。まずここ一週間はおまえさんをここにおいて置くが、その後はおまえは違う男をここで見かけることだろうよ」

「下女め！」

そう言い捨てると、男は母屋に向かって歩き出した。

女はシャワーを浴びて髪を乾かしているところだった。食堂のテーブルの椅子に腰掛けていた。

男は、濡れたスウェットの上下を着たまま、しばらく女を見ていた。老婆の言葉が頭をよぎり、そう見てはいけない、彼女は違うのだ、あの言葉は老婆の願望なのだ、自分が長年手伝いをしていて同等の立場をおそらく得られず、欲求不満のあの老婆がこしらえた彼女への偏見なのだ、そうに違いない。

フランス人が住んでいた家に当時では物珍しいメガネと海外でしか手に入らないと思われる服装をしたお手伝いさんが子供だった俺の近所に住んでいた。彼女はよく俺に犬の話をし、あるときフランス人の住む屋敷に連れて行こうとした。彼女のことは両親も知っていたし、俺も知っていたから、顔なじみで誘拐などといった大それたことなどは当時考えには無かった。だから、知っている人に素直について行ったというのが正しいだろう。屋敷の庭にはアジサイが草薺に紛れて大きな鮮やかな群青色した花を咲かせていた。雨の降りつづける六月だったと思う。空は白く輝いてあたりは静まり返り、大きな樹が庭には植えられており、枝は、自由に伸びやかに手を広げて、その輝く空から降り注ぐ雨と光の中、俺は放尿した。お手伝いさんは、その間、しゃがんでいた。硬くなって、まっすぐに伸びたそれを、うっとり見つめていた。彼女は視姦をしていたのだろう。そして視姦という行為がまだ小さな子供だった俺に芽生えさせたことに今考えればそうなる。放尿をし終えて、俺は半ズボンのチャックを閉めて、彼女に手を引かれて、屋敷に上がりチーズサンドと甘いカルピスを与えられ上機嫌だった。

タオルで髪を拭き、乾かしているとき女は首を俺のほうに向けて頭をこんこん動かしながら、「あなたさっきもそうだったわ、なぜじっと私のことを見つめたり、喋んなかったりしているのかしら…どうしてなの？」

「いいや、俺は喋るのが下手で、昔友人の結婚式に出席したときにスピーチを頼まれたんだ。その時スピーチなんか知らなくて、図書館にはじめて行って…いや、本代を惜しんだわけじゃないんだ、ただそんなことは稀だし、使い古す本でもなさそうだったから…」

「それは本代を惜しんだってということと同じよ」

「なぜ？」

「だってそうじゃない？代金を支払う価値がその本には無いと考えていたからよ」

「なぜ、そう責めるように話すんだ」

男は少し不機嫌そうにはしていたものの、女に対して怒りを見せるようなことはしたくなかったため、静かに話し出した。

「だから、分かった、俺は本代を惜しんだんだ。そうしよう」

「私…別にそんな責めるように言ったかしら？…」

「そう聞こえたんだ、たぶんはなれに住んでいる老婆に会ったからだろう」

「口ウバ？」

「そう、老婆さ、お手伝いさんみたいだ、話を聞いていたら」

「あの人のことね、そう、お手伝いさんよ、でも…私の悪口を言っていなかった？」

「色情狂だって…」

「また、その手か…」

彼女は余裕のある微笑を顔に浮かべた。これは明らかに老婆の言ったことが出たら目であることを示しており、俺は、頭に渦巻いていた、毒々しい偏見を払拭するには十分な言葉であった。強姦されたこと、誰かまわす交渉をするという彼女への言葉、イメージはやはり老婆のあの暑苦しい離での妄想でしかなかったのだ、ということに確信を抱いた。そして、彼女に近づいて傍らに椅子を持っていき、腰掛けた。彼女の顔を一瞬見た。

俺が男色だという噂が学生時代に流れた。とんでもない噂を俺は調べて行って馬鹿でかい陰険な顔をした男に突き当たった。そいつはぶるぶる震えながら詰問する俺に恐れをなして謝った。陰険な人間は数え切れないほどいる。あいつにもっと接近して、逆にあいつが男色家だということを仄めかしたほうがよかったのかもしれない。あの糖尿病の男に少し似ていた。

彼女は、「髪をドライヤーで乾かすから、少しここにいて？あら、びしょ濡れじゃない、スウェットを乾燥機に入れて乾かすわ」と、言って、俺を裸にしてどこかに行ってしまった。裸で椅子に腰掛けてバナナを齧った。時刻は七時を回っている。庭のほうに目を向けると低木やら、伸びきった雑草の類で離れの窓はすぐには見えず、これでは庭先で彼女を抱いた際に回りに気を取られないのはあたりまえだと気付いた。バナナは本当に甘い。上階があるのだろうか。上で何か動く音がする。ネズミ…俺は笑い、それにしてもは軽やかな音ではない、もっとずっしりとした音だ。そのことにはあまり気にはしなかった。

彼女はどこか別の部屋を回ったようで、この食堂に来るまで少し時間がかかった。俺は次第に酔いから醒めはじめ、眠たくなってきた。

桜吹雪が春を示していたのだろう。それは度を越しており、あたりは桜の花で白くなってしまっていた。俺は漆黒の所々金で飾られた台に乗せられ、顔は判別できないが何人かで運ばれていた。結婚式なのだ。お城が見え、不思議なことに桜の花びらは誰一人として頭髪に付着しなかった。俺は先頭に行く台の上の女に目をやった。後姿で誰であるか分からない。日本髪をしていて、それが地毛であった。しばらくのあいだ台を担いだ人々は何も文句を言わず黙々と進んだ。父が囁く。「年の差などは関係が無い。いま幸せだったらそれでいい。」

真昼ののんびりとした時刻で、陽光が二人を包み込んでいた。俺は父に披露宴は彼女がやりたいといたらやってくれ、俺は正直言って好きじゃない、と小さな声でいった。父は分かったようだ。桜並木を長いこと進んだ。台を担ぐ人々を除いて誰もいなかった。城は俺と女の行進が続くにつれはっきりしてきた。城の窓から人が覗いていた。カメラを腹のところにぶら下げているから観光客のようだ。彼は盛んにカメラを背中に回し、撮るまいとしていた。その男を俺は見ていると、傍にその男のつれだろうか、女と子供が狭い窓に顔を出した。女はその男の服を引っ張っている。まるで見てはいけないような素振りだ。子供は、窓枠には届かないらしく、女が抱えて、俺と女の結婚式を見物していた。カメラをぶら下げた男が、カメラで、俺の行進を撮ろうとした。女はその男の手を叩き、カメラは再び腹のところに振り子のように揺れていた。男は何か文句を女に言ったのであろうか、口論をしている様子だった。

先頭に行く女が振り返ると、離れの老婆であった。俺は、その老婆と結婚することになることをはじめて知った。

うたたねしたらしい。目が覚めて、呼吸を整えると、食堂に女が来た。裸の俺を別室に案内した。彼女は、裸であることを気にも留めないらしい。それはそうだろう、彼女にとって、俺は裸であるべきなのだから…露出狂の俺と服を着た彼女はある一定の距離がある。その距離というものは、今のところ固定されている。その固定されている距離というものを、少し不快に感じながらも、従っていた。

「夢を見たんだ。老婆の夢さ、あの老婆と俺が結婚するという夢さ」

彼女はそれには答えず、ただ不思議ね、としか言わなかった。俺はその夢を歯科医である彼女に分析を求めていたのかもしれない。そして、その分析は安心できるものであり、慰めてくれることを期待しすぎたのかもしれない。それは甘かった。なぜか、シャワーを浴びた彼女、上階から降りてきた彼女は別人のように冷たかった。それは俺の思い過ごしかもしれない。俺を誘惑するシャンプーの匂い。彼女の髪をいやというほど鼻を近づけて嗅ぎたかった。服装はこれからストレッチでもするかのような黒の綿のスポーツウェアであった。埃のたぐいは付いてはおらず、きちんと洗濯をし、新品のように思えた。また、彼女に接近しづらくなった。

別室は一階だった。和室で、八畳ほどの広さだ。既に布団が敷かれてあった。彼女は枕元にあるパジャマを持って近づいてきた。含み笑い。

「これも父のものなの…あなたって、父の体型にそっくり、何でもあってしまうんだもの」

少し意地悪く、俺は彼女に言った。

「そんなにお父さんのことを憎んでいたのか？」

「憎む？」

「そう、きみと俺には何か、距離がある、その距離っていうのは、きみは服をきちんと着て、俺は裸だ、これは俺を裸にしておき、露出狂の枠に閉じ込めていることと同じさ」

「そうかしら。でもスウェットは乾燥機の中、今乾かしているところなの…あなた、露出狂じゃないって言ったじゃない？…それに、さっき庭先で…」彼女の顔が赤くなった。どう見ても老婆の話が気になる。

「お父さんはきみを可愛がっていたはずさ、叱られつづけたとか、俺はその辺のことは分からない。ただ、俺を露出狂の枠に入れておくことは全てきみの計算で、そうすることで俺をお父さんに見立てて、復讐している気がするんだ」

「復讐なんかしないわよ、だって父を私は憎んでもいないし、それにあなたに関心を持ったのは、確かにあなたが露出狂じゃないかって、感じたからかもしれないけど、違うって言ったから、私は、あなたを普通の男性として接してきたつもりよ、食事を作らなかったから、そう意地悪を言うの？」

いつの間にか、彼女の語尾を濁す喋り方がなおっていた。それが、アルコールのせいなのか、それとも違う要因なのかははっきりしない。

二人の間に、少し隙間風が吹いたように感じた。上階にあがってから彼女が変わった。

「ごめんなさい。少し疲れたみたい。あなた疲れたい？私、少し休むわ…」

パジャマを着る間、彼女は俺を見ていた。彼女は俺のこの軟な肉体を見て、どう思うのだろうか？もっと筋骨隆々とした男を彼女は知っているはずだ。それとも彼女は、何を見て、男を好くのだろうか。雨音が一段と増し、男は女にキスをして眠った。

翌朝、いったん起きた男は、この家をぐるりと一巡りしてみようかと考えた。時刻は六時半である。食堂に行って、冷蔵庫からミネラルウォーターを出して、はじめて気付いたが、この冷蔵庫には、あの糖尿病の男と同じく、ミネラルウォーターしか入っていない。卵も牛乳も、バターもジャムの無ければ、生活感を漂わせるその他の品々が無いのだ。

昨日でビールはきれたようだ。そして、冷蔵庫前のバナナ。不思議に思って、テーブルについて一飲みして、女はどこにいるかを捜してみた。庭先に通じる廊下を右に行ってみた。すると、和室が二つあり、どちらも障子戸が閉められており、手前の和室の戸を少し引いてみた。すると暗がりのなか布団が敷かれ、彼女の乱れた髪が寝相の悪さを示しており、黒のスポーツウェアのパンツから細長い小さな足の裏が見えた。男はその足を手にとり、この足を昨日は口にしたのだ、と思い、少し引っ張ってみたところ、彼女が起きた。「どうしたの？こんな早くに起きて…」

「いや、部屋を見て回ろうとしたんだがね、その一番目が、きみの部屋だったんだ、今六時半だ。起こしてすまなかった」

その時、彼女は、すごい驚きをあらわす顔をして、化粧を落とした素顔で、「部屋を見て回ったの？ね！ほんとに！」と叫んだ。

「なぜそんなに驚くんだ、別に盗んだりなどするわけがないとも。そうだ、ちょっとした好奇心だよ」と、彼女の動揺を鎮めようと冷静に言った。

「なんで、そんなことするのよ！」

「別に見ていないよ、そんなに怒るなよ」

「冗談でしょ？」

しかし、男は否定しなかった。女はしばらくの間、怒りが静まらなかったようだが、寝起きが悪いのと重なったようで、俯いた状態で、聞き取れないくらいの声で、ぼそぼそ言っていた。男はそんなに部屋を見て回ることが、女にとって嫌なことなのかが、分からなかった。女は何かを隠しているのだろうか。

乱れたショートカットの髪を手櫛で後ろにかきあげて、あくびをした。男は女の布団の枕もとで髪の毛の残り香を嗅ぎながら、寝そべて、女の機嫌がなおるのを待ちつづけた。

何もかもが二次元の世界での出来事であった。ポルノビデオ、雑誌、おもちゃ、こんにやく、…それから本物を得るようになってきた。だが、小道を迷い込んできた知らない女を襲うなどといったことは嫌いであった。また、レイプ物のビデオは嫌いであった。好んで見るものを蔑んだ。本物でなくては快樂は得られなくなってきた。

ひょっとすると、彼女が色情狂ではなく、俺のほう そうなのかもしれない。それにしても、この女の行動は不審だ。しばらく、横になっていると、彼女は目がさめたのか、いつのまにか着替えを済ませ、俺の寝巻きのズボンを下げてきた。この女は昨日も俺との関係になると必ず、自分はきちんとした格好をする。今日は淡いグレーの夏物のスーツであった。

「なぜ、きみは俺を相手にするときにきちんとした格好をするのか不思議だ」

男が下半身を剥き出しにした状態で、朝のため、部分は、すっかり、いつもより大きくなっているのを、含み笑いで擦っている、女の耳を見ながら言うと、女はその行為を止めずに、言った。

「なぜって…知らない…でも、…」

「でも？」

と男は腰を少し動かして、彼女に手が伸びる。そうして、男は女のスカートを捲り上げ、女の中に入っていった。朝食を抜いているため、男は空腹と性欲のいずれが人間にとって強い欲求なのかを考えている。

「なぜかしら、…でも、こうしているほうが、私にとっては…」

「興奮する？」

「そう」

と、言って、女は男のされるままになっていた。男は、頭の中で、普通こうしてくれ、という要望は男のほうからするものだと考えて、そして、このことが、この女相手では全く逆の立場になってしまっている。これではまたしても、彼女が主導権を握っていることになり、少し強めに腰を動かした。すると二階で、どん、という音がして、彼女が絞まった。

「なんか、いるのか？二階に」

男は彼女から出てくる。

「本当のことを言ってくれ」

つとめて冷静に言った。すると、彼女は上を向いて、目をはっきりと開け、また俺を招き入れようとする。

「秘密でもあるのか？」といって、男は少し抵抗する。

彼女はまた俯いて、ぼそぼそ言い始めた。彼女はスカートの皺を伸ばすようにして、足を崩して座った。そして、ズボン을上げている男の手を抑えて、そのままでいてくれない？と小さな声で言った。

「どう見てもフェアじゃない、きみは服を整えて、俺は下半身剥き出しだ、こんな変な状態は嫌だ」

「そうね、でもあなたが好きだから…」

「好き、って言うなら、君も裸になったらどうだい？」

「あのね、二階にはね、そう、二階には…いるの…」

「旦那さんかい？それとも、恋人かね？」

彼女は視線を一定にしないで、ズボンをまたしても下ろしにかかる。まるで、性欲の虜のようだ。

「違う…」

女は呟いた。二階には、誰かがいることには違うらしいが、亭主でも、恋人でもないらしい。老婆の話からすると、この女の母親かもしれない。

「お母さんが、二階にいるのか？」

男が、くすぐったく感じて、避けるように、枕もとから逃げるようにすると、彼女は口元に笑みを浮かべて、「母なら死んだわ…」と言った。

女は朝食にまたしてもバナナを調達してきて、男と女はバナナとミネラルウォーターで、一日を、女は男を口に含み、擦り、男は女の中に入り、そうして過ごした。

男は二階が気になっていたらしく、集中がときおり途切れたりしたものの、快楽を男も女も、盛んに求めた。

「離れの老婆、いやお手伝いさんは何にも食べないで平気なのか？きみは用意をしないけど、俺の見たかぎりでは、あれでは町に出て、買い物をして、自炊をできるようには思えないが」

女にキスをしながら言った。女はしばらく黙っていたが、頭を動かすのを名残惜しいようにして口を離し、

「糠みそでどうにか…」と男を下から覗き見て、「おしんこうで食べるの…魚…ごめんなさい、あなたオサカナだったのよね…食べないのよ、あの人私をひどく嫌っているの、話を聞かないから」

また口に含んだ。

「また訊くけど、二階にはお母さんでなく、何がいるんだい？俺は、それがひどく気になる。それを教えてくれたら、もっと興奮する…」

女の髪を撫でながら言った。

「今度、…案内するわよ。でも、今はこうしてきたいの。でも、もしあなたが二階を知ったときのことを考えると、私とても怖いの…」

女は腰をくねらせて言った。

三度目のひきつけ……四度目のひきつけはなく、女が、脚を蠶螂のようにして男の腰に絡み付け、その強さはかなりのものであった。

男は、こうした関係にはいずれは飽和が訪れ、俺か彼女か、いずれかが離れることであろう、一人芝居はしたくないと少し考えた。

昼になり、女はエアコンを切って、外気を入れるため障子を開けた。むっとした空気が入り込んで、二酸化炭素と、粘液の入り混じった部屋の空気が、しばらくの間動くこともなく停滞してはいたものの、広い部屋であったため、そうひどくは感じなかった。女は汚れたシーツを持って、洗濯機に向かった。男は女の許可をもらい、居間を案内され、そこのソファで腰をおろした。首を捻って、関節をほぐす。コキコキ、という音がした。腰がしばらく痛みを感じていた。生温いミネラルウォーターをいったん冷蔵庫に入れた。男が知っているのは風呂場と居間、食堂、宛がわれた自分の部屋、そして彼女の部屋。しばらくソファに横になって静かな、弛緩した体、痺れを少し感じる体を休めた。汗をかかなかったため、体はべとつかなかったが、この居間では、エアコンをかけていないらしく、次第に外気の暑さで男は少し汗が、背中、太もも、腕に、うっすらと浮かびだした。汗ばんだ関係もそう悪くはないだろう、と頭を過ぎった。

洗濯機の中に、汚れたシーツのほか、下着、などを入れて、女は居間にやってきた。二槽式の洗濯機で、今は全自動だから、それが欲しいわ、と男の傍らに座り言った。男は、現金は冷凍倉庫にあるし、それに今はきみの家で一文なしで過ごしている、いずれは仕事を見つけてきみに全自動の洗濯機を買う、と約束をした。

「まさか、昼もバナナかい？」と男は少しは彼女の手料理を食べたく、「できれば、君が記憶しているレシピで何かこしらえてくれないか？」

すると、女が照れくさそうにして、

「私、あまり料理得意じゃないの、この前のしし唐を炒めたのが料理って言えばそうなのかもしれないけど…そうね、…カレーライスくらいかな、できるのは…」と言い、首を傾げて、「外食しない？」と誘った。

男は手料理にこだわり、「それもいいが、それには、こんな格好じゃ行けないだろう、分かるよね、…だから、何か服を貸してくれないか？」と、上着をはたつかせた。

「服ね…父のはもうほとんど残っていないの、処分して、それに今あなたが着ているスウェットスーツは私が時々着ているものなの」と、いった。

「そうか…ならば、カレーライスでいいから作ってくれないか？」

「じゃ、さっそく、下手よ、食べられたものじゃないかもしれないけれど…」と言い残して、買い物に出かけた。

男はしばらく、ソファで横になって、疲れた体を休めていたが、ふと彼女が買い物に行っている間に、この家を調べよう、それも二階を知りたい、と思い、体を起こした。

静かで、金持ちが集合している、この一帯は、外に家の音が漏れない工夫をしているのであろうか、それとも、この家自体が、外界の音を遮断する工夫をしているのだろうか、それにしても、古風な作りの家だから、そんな工夫を施すことは、何かしら違和感がある。疑問に思っていた。誰もいないことは分かっていたものの、誰かがおれを観察しているのではないだろうか、というおどおどした感じで、居間を出た。

食堂を通り過ぎ、二階に通じる階段を探したところ、庭に面した廊下の左側に階段があった。暗く、日の光を浴びない静物画のような木の階段であった。そこを静かに上がって二階に上がった。

二階には四つのドアがあった。一つずつ調べてみよう、それに、ここで彼女に見つかるどじを踏むことは許されない。もし、この二階を見て回ることが発覚した場合には、今朝の彼女のあの怒りからして、俺は彼女に放り出されてしまうだろう、そう考え、男は階下の様子を耳をそばだてて聞き、その一方で、部屋を見て回るというかなり疲れることをした。

一つ目のドアノブを回すと、寝室のようであり、ベッドがひとつ、その部屋の窓にはレースのカーテンがかかっていた。明るく、南に面した快適な部屋であり、またなぜ彼女はここに寝ないのかが、不思議であった。もうひとつのドアノブを回すが開かない、そして、もうひとつのドアは開いた。そこは北側に面した部屋であり、狭かった。冬はさぞかし寒いだろう、おそらくこの部屋は納戸であり、かつては彼女の父親がオーディオ製品やらを置いておいたに違いない、今は何もなく、フローリングの部屋であった。もうひとつの部屋を見た時に階下で物音がした。そこで、その部屋のドアを閉めて、階段を下りていった。

あの部屋は、広くたぶん二世帯になったときに居間と食堂を兼ね備えたものにしようとしていたに違いない。階段下には、老婆が待ち構えていて、手招きをしていた。その表情はまるで、くだらないゴシップを手にしたマスコミの人間のようにであった。

「何なんだね、婆さん、あんたがこの前に言っていたことは全て出たら目じゃないか」

彼女でないことが分かって、安心して、階段下に降りた。すると、老婆は、赤い風船を破裂したように舌をぺろぺろ出しながら話し始めた。なぜ、この老婆は、話の前に、舌が口から出て、動き回ったのか分からなかった。

「おまえさんは、あの女と、ずっとこんな感じにいるのかい？だとしたら、私からのそれこそ老婆心で言うんだがね、今のうちが逃げ時だよ、これからは、もっと逃げ出せにくくなるだろうからね。ところで、二階には行ってどう思ったんだい、私も不思議だから案内してくれないだろうか。知っているんだろう？知っている顔をしている。ふふふ、分かっているんだろ、二階に何があるか、私はこのとおり、足腰いかれちゃったから、階段を上る気力も体力もないがね、おおよその見当はつくんさ、何を見たんだね？ほーら、言いたくなる顔をしている」

と老婆は、男の顎を――ちょうど、髭がうっすらと伸びてカビのようになっていたのであった――撫でて、ふざけた感じで首を左右に振った。

「何にも知らないさ、あんたこそこの家についちゃよく知っているんじゃないのかい、『お嬢様』の生い立ちについてさ、二階には何がいるんだい、ペットかい？」

と、男は、顎を執拗に撫でる、この鬱陶しい老婆の手をどけながら言った。

「それは知らないさ、ただ分かっていることは、あの女は二階に人を閉じ込めているらしい、ということさ」  
「恋人か？」

「いや違うよ、お嬢様のおもちゃだよ」

「おもちゃ？」

「そうとも、そいつはもっぱらお嬢様の張りかたの役割をしているわけで、おまえさんが連れられてから、お嬢様は二階の人には声すらかけない、私は離れで聞き耳を立てているんだがね、聞こえてくるのは、お嬢様の喘ぎ声とおまえさんの汚いうめき声さ、その汚さったらありゃしないよ、どうして、おまえさんのような駄目な人間を、うちに連れてきたのか、お嬢様の気が知れない。よりもよって、こんな薄汚い乞食を連れてくるとは」

と、老婆は笑い、

「それから、おまえさんはどうして、こう、こ汚いんだね？生まれはどこだね？お嬢様の趣味はそれはよかった、次々にいい男を母屋に連れこんで、…」

「この前は駄目な人間だとか、とっかえひっかえ、って言ったじゃないか」

と、男は老婆を罵倒するように話し出した。

「まだ、二日しかたっていないわけだから、何も分からない、ただ言えることは婆さんと彼女とは仲が悪い、そして彼女が色情狂というのも嘘、それからあの暑苦しいそれこそ汚い離れであんたが話したことは全て婆さん、あんたの妄想、ということだ」と言って、少し様子を見た。

すると、老婆は、それでなくても萎びた花のようにになっている顔に落ち込んだ表情を覗かせて、急に元気を無くしたのだろうか、返答をしてこなかった。次第に、気の毒に感じてきた。

「遅くなると思うが、これから彼女と食事をする、もしよかったら、あとで彼女がトイレにでも行っているときか、何か別の用事で俺と接触しない場合に、遅くなるかもしれないが、食べ物を離れに持っていくつもりだ」

その言葉を聞いて、老婆は少しは男に対して見下すような素振り、言動はみせないだろうと思ったが、男は浅はかであったのだろう、男に向かって老婆は、

「そんな手で私の口を塞ごうという魂胆かい？だとしたら、私の見たとおりにおまえさんはほんとうの乞食さ」と言った。

そして、口を真一文字に結んで、冷蔵庫の前に立ち、天井を見上げて、冷蔵庫の扉を開け、ミネラルウォーターのペットボトル――これは先ほど男が入れて冷やしておいたものであるが、老婆はそのふたが開き、量が減っていることに気付かないらしく――を取り出すと、一口飲んで、こそこそと母屋から離れに向かって歩いていったが、ほんとうに信じられないのは、庭先に出るときの老婆の身軽さであった。

男はしばらくソファでくつろいでいた。日が昇り、外界を照りつける日光に比べて、この居間はもう熱気でとてもではないがじっとしていられなかった。そこで、冷たくなったミネラルウォーターを冷蔵庫に取りに行き、そこで冷蔵庫から流れてくる冷気で火照った体を慰めていどに冷やしていた。エアコンをつければいい、と居間のリモコンを探すが見つからない。しかたなく、エアコンの本体にあるボタンで冷房にした。機械にはそれほど不器用ではない。

父がラジオを玄関に叩きつけた。ラジオは無惨にも中身の部品をちょうど車に轢かれ、内臓が飛び出した猫のように玄関のコンクリートの地面の上でばらばらになってしまった。中学のときだろう、母が浮気をし始め父が腐っていたときのことだ。父は苛立つ毎日を送っていた。そんな折、俺がラジオの調子がおかしい、と父に言って修理を頼んだのだ。父は始め分解をして、どこだろう、どこだろう、と独り言を言っていた。そこで、俺も悪いのだが、お母さんはどこにいるんだろう、といったのを皮切りに父は怒り出し、何だか知らないが、このラジオは壊れている、おまえか？壊したのは、と言い出した。

俺は、父の怒りがラジオで生じたのではなく、母に関することを口走ったからだ、その当時感じた。そこで、俺はラジオを父から取り上げようとした。そうすると、父はまたぐっと怒りをこらえて、俺の差し出した手を無視した。しかたなく、自室に行こうとすると、父が、「おまえ母さんのことなど口にするな、それでなくとも仕事がうまくいかないんだ、」といい怒りを表すため息を強くすると、ラジオを持って玄関に向かった。「お父さん、いいよ、修理に出すから」というのも無視をし、ラジオは壊された…なんだか自分が玄関にたたきつけられた気がした。

診察室のドアが開き、ビニール袋ひとつに詰め込んだ食料が来た。居間に入ってきた彼女は、は一っと息をすると、笑顔を男に送った。それに答えて、男は、「ご苦労かけたね、わるいね、楽しみだよ、手伝おうか」と言うと、彼女はいいの、挑戦してみる、といて台所に向かった。

「暑いの外」

「ここを開けておくと冷気が入るだろう、真夏日だから火を使っているとしんどいだろう」

居間と食堂を仕切っているドアを引いた。

「そんなに気にしないで、エアコンなら、この食堂にもあるから」

男は、冷えてきた居間のソファで横になった。そのうち、スパイスの香りが、漂いだした。男は立ち上がって、台所に向かい、圧力鍋が、この家にはないようで、作りのいい鍋を使って、カレーライスをかき出しているのを、目にした。

そして、彼女の肩を掴んだ。彼女は、調理を止めてじっと男の顔を見た。その表情には、この台所でも関係を持っていかまわれないという合図のように、男は受け取った。

男は女の髪を撫でて、「きれいな髪だね」と言い、微笑した。なぜか気まずい雰囲気にも男は飲み込まれ、なぜ気まずいのか分からずに、こう言うのであった。

「包丁を研ぐのは得意なんだ」

「今度お願い、研いでもらって、ずいぶん経つ。ほとんど使わないけど」

カレーライスができるまで少し時間がかかった。彼女の野菜を刻む、慣れない、中断したり、勢いよくなったりする音。当たり前なことでも、スーツを着て、エプロンをし、ひざ上のスカートをはいてそこから、剥き出しになる彼女の脹脛を見ていると、あの脹脛を擦りたくなる。

擦って、彼女はくすくす笑いながら、ニンジン切る。ニンジンの皮は皮むき機で削ぐ。ニンジンの皮を削ぐのと同じように、彼女の脹脛の美しさを削いでうっとりとする。肉を切るときに、彼女の脹脛は、硬くなり、やわらかい、淑やかな筋肉が浮かぶ。シンクから、ガス台に動くときも脹脛に目玉が張り付く。踵の正確な造型の計算。スーパーコンピューターでも弾き出せない彼女の踵から脹脛。それを見て、彼女の足の膚に成り果てる。スパイスの香り、男は食欲などどうでもよくなった。

「もう少しでできるからね、ちょっと待っていて…今何時？…三時か…昼にしては遅すぎるし、夜にしては早すぎるわね。おやつにカレーライス…」

彼女が男を見て、あどけない表情で微笑んだ。

「時々抱きしめたくなるの、あなた見ていると…なぜか分からない…」

と言い出すと、男は女の口を指でなぞり、指を二本、口に入れた。彼女の舌が指に絡みつく。下にすると降りていき、脹脛を空気を食べるようにして軽く噛む。

「ねえ、歯型とらしてくれない？」

「どうして？」

女は黙ったまま冷蔵庫に向かい、製氷機からひとつ氷を取り出すと、口に入れコリッコリッと齧った。

歯型…彼女がかつて歯科医をしていたことを想像する。俺と関係を持って、彼女のことは深くは知らないものの、二階に何かがあるか彼女は未だに教えてくれないものの、俺の部分、永久に残しておける部分、それを欲している。なぜ、歯型なのだろうか？

確かに、俺も歯に拘ったことがあった。白く輝き、唾液が銀色の糸を引き、前歯と下顎の歯に架かる…女だった。彼女は俺とはかなり年の離れた女であった。俺は子供のときの記憶を、彼女を引き寄せて、探り出す、きっとある何かある。なぜだかその記憶だけは消え去っていた。ただ、その女の歯だけが印象に残っていて、当時心では眼前に浮かばず、容易く消え去る気持ちが頭を持ち上げかかる。そうだ、恋愛感情。それが浮かばなかった。懐いても恋愛という簡単な気持ちが浮かばなかった。だから可愛がられた。いま考えてもその唾液のかほそい消えそうな糸がなぜだか、俺の心に部分を欲するという原型を作り出していたことに気付かせてくれた。今、目の前の女と同じ気持ちも、そうなのだろうか。

コツっと、こめかみを人差し指で突っつかれ、俺は気付く。

「また…もうできたわよ、冗談よ、歯型なんていらんわ、だけど何かあなたの記念が欲しいの、そう思っただけよ、深刻に考えてしまっているわ…」と笑った。

女と男は冷房をきかせた食堂でカレーライスを食べる。味はどうか、辛すぎないか、などの会話が交わされたくらいで、目的は食欲というふたりの欲求をまず叶えることであった。それが叶ってから、彼女の体を欲する。そうだ、食欲が満たされなくては、ことがうまく運ばない。ひたすら食べている。俺はせっかく作ってくれたものなので、お代わりをし、サラダを彼女が手につけないので、その分を食べた。食欲はもう充分満たされた。そのとき二階から足音がした。彼女は困惑した表情をした。

階段を降りきったようで、人気のする階段下を頭の中で想像した。しばらくすると、それはひたひたと廊下を歩き、食堂のドアの外に立っていた。

二人は食事を終え、女は、男の隣に立ち、屈んで男の頬を唇でくすぐり、どうにか唇を合わせようとしていた。

「誰か上から降りてきて、いまそこにいるみたいだが…」

彼女の肩を、鼻で小突いて、気付かせる。

「ねえ、居間に行かない？テレビ見ましょうよ…」

「誰かいるようだよ」

言い続ける男の口を塞ごうと、彼女が手を差し出したとき、少しドアが開いた。

「おい、誰だい？」

彼女の手を握って、一本一本盲目のように手探りで確かめながら、

「おい、いるんだったら、出てくるといい、もう俺は長いことここにいる、悪いから、出て行こうと思う、誰だい？」

と言って、彼女に問いかけようとしたとき、一人の皮の仮面を被った大きな男が食堂に入ってきた。

その男は、上半身には引っかき傷があり、黒い皮のブリーフを穿き、足には足輪がついており、その足輪は鎖で繋がっていたため、うまいこと歩けないのであった。

彼女は、険しい顔をその男に向けると、握られていた手を軽く離し、立ち向かって進み、腰に手を当てて聳え立った。

その男の口には猿轡を施してあったために涎がたれ流れて、もぐもぐと口を動かしてはシュウシュウ不鮮明な音を口から出していた。

男は皮仮面の男を見て唾然とした。女はその男を無視するようにして、男の視界に皮仮面の男が入らないようにして、大きく脚を広げて、跨ぎ、男の太ももの上に乗かって、胸を顔に押し当て、両手を体に巻きつけ、顔を近づけ、キスをしようとした。すると、キスを一回した。

「あの猿轡を取ってあげたら」と男は言った。

「あなたの頼みだから…」

彼女は、抱擁をとき、立ち上がって、皮仮面の男に近づいた。そして、猿轡を取った。しかし、涎は依然たれつづけ、女のほうに顔を向け、

「何か食物をください」と言った。

女は、テーブルにいる男に近寄り、

「今、それどころじゃないの…」

男に頬擦りをした。

「何か与えたら」

「だめ、絶対だめ、今はこうしたいの」

甘える口調で言い、男を見つめた。

皮仮面の男を、彼女はしぶしぶ紹介した。名前はMであり、もう長くこの家の二階にいるという。いるのか、飼っているのか、男は、Mに対して想像してみたが、どうみても奴隷でしかなかった。

奴隷Mはもう一度、食物をください、と言ったが、今度は彼女がどすのきいた声で、

「ハウス！しっ、しっ！」と怒鳴り、

奴隷Mに再び猿轡を施した。しばらく、彼女と奴隷Mは対峙していたが、彼のほうから、二階に自主的に上がった。

彼女は、二階にあの男がいるのよ、としか言わず、それが彼女の性癖であることを男は想像で補うしかなかった。彼女が、普段の彼女に戻るまで少し時間がかかった。その間、男は彼女を見たりはしなかった。まるでコンタクトレンズを嵌めるのを見ないように、唾が腕に飛んできたときに知らない振りをするように、彼女を問い詰めないように、彼女をそっとしておいた。そのことに彼女は気付いたらしく、あなたってやさしいのね、まだこの家にいてもいいのよ、…かまわないわ…と小さな声で言った。

万引きの少女。意図したことはなかった。ただ、代金を払わず、小さな洋服の中にしまいこんだ、ピンクのウサギのぬいぐるみ。店員が、他の客が見ている前で大声で怒鳴りつけ、詰り、見下した。年齢は小学低学年くらい。怯えすくみ、涙を流し、頬は赤く、無理やりに、罪悪感を、店員に注ぎ込まれ、当惑している女の子…もう、その店には俺は行かないことにした。その店員は気が狂い、入院しているようだ。

しばらく、彼女は俯いて何も喋らなかった。男も彼女のこしらえた傷口に触れないように、かさぶたになるまで待っていた。彼女はおそらく長い間に培われた性癖を、この目の前の、関係を持った男に説教されることなど望んではいないだろう。男にとって奴隷を持つこと、そして、その一方で自分と濃厚な時間を過ごす、二面性を、最初は受け入れにくいものがあったが、その原因を突き止めるにはそれ相応の訓練、教育、体験が必要ではないだろうか。

汚れて、食べ終わったカレーライスの皿を眺めながら、そう思った。彼女は、あの男とは、どんな関係かが、老婆の言うおもちゃでしかないのであろうか？、張り方でしかないのではないのか。だとすると、俺はこれから先、この女にどのような待遇を受けるのであろうか？

彼女、今俯いて、すっかり食事を用意していた陽気な彼女が萎れていた。俺は近寄って、彼女の髪を撫でるしかなかった。彼女は飼い犬が粗相をして、そこの主人が、片付けをしているときの犬のように、すっかり、これから罰せられるような、弱気な表情をしていた。

励ます？それも変だ。俺は、この件に関して、余程のことがないかぎり、彼女との会話には持ち出さないようにした。ただ、あの奴隷をいずれは解放してあげること、そして彼に食事くらいは用意してあげることだけは望んでいた。

ようやく彼女が顔を上げた。彼女は、はじめは暗く、沈んだ顔をしていた。「ばれてしまった…こういう事はもう少しはつきりをあなたに知らせておけばよかったの…でも、そうしたら、あなたが離れていくようで…怖かったの…」

「恐れることはないんだ。誰しもそうした性癖の一つや二つ持つはずさ、俺の知っている男はセックスのときに女の首を締めるんだ。そうして弱める。そうしているんだ」

彼女は皿を片付け始めた、その動作には元気がなかった。疲れきった母親が、やつれた表情で、重い動作で子供たちの食器を片付けしているようだ。

「そうだ、テレビを見よう、さっきそういったとも、テレビを二人で見よう」

彼女は作り笑いをして、同意してくれた。その彼女の心は、見捨てられるという不安と、そのときを想像した、悲しさで、満ちていたかもしれない。

シンクに、汚れた皿をいれ、水に漬け、彼女は、コーヒーにするか、緑茶にするか、聞いてきたので、きみの好きなものにあわせると言った。ぎこちなさは会話にないだろうか、俺はずいぶんと神経を細やかにしていた。

居間に二人は移り、14インチのテレビ、それも白黒で、時代に不釣合いのチャンネルがついていた。コードがテレビの後ろから伸びており、そのコードは先が二股に分かれていて、黄金色の銅線が黒い塩化ビニールのコードから剥き出しになっていた。

「これ、父の形見のものなの、父が市販のテレビを改良したの」

そして、彼女は、やぶ蚊を取るためか、蚊取り線香を用意した。蚊取り線香をコードの傍に置いた。そして、彼女は銅線の先端を渦を巻いている蚊取り線香の終わりの穴に装着した。マッチをすり、火を蚊取り線香につけた。

すると、テレビの画面が薄ぼんやりと浮かび上がった。画面には、肥大化し、窪みのある、巨大な夏蜜柑のような俳優が写った。それはドラマの一場面であり、よれよれのシャツの子役が、

——とおちゃん、今度犬を飼っておくれよ、柴犬が欲しいんだ、名前も考えたんだチ口って言うんだ、妹と  
考えて決めたんだ

先ほどの俳優は今のせりふからして父親役なのだろう。父親は、

——それはかあちゃんに言うんだ、いいか洋助、とおちゃんはこれから…

と、言ったところで、線香を男が見ると、線香は導火線のように激しく、ちりちりと燃え、見る見る灰になっ  
ていき、もう銅線がある穴のところまで来ていた。

「これ、すごく電気食うっていうのが分かるでしょ、父もその辺を気にしていたの、ただ蚊を取る役目とテ  
レビを見られるという役目、一石二鳥でいい、と父は考案したの…」と、女は消えかかった白黒テレビの  
コードを引き抜くと、もうひとつ蚊取り線香を持ってきた。

「もういいよ、何か別のことをしよう、トランプ…そうだ、ポーカーをやろう」と、男が言うと、  
女はポーカーは知らないといった。

「すまないが、服を買ってきてくれないか、カジュアルなものでいい。そうして、外に出ないか。お茶を飲  
んで、映画でも見に行かないか？」と男は言うが、一方で、全て彼女が金を払うのかと思うと情けなく  
なってきた。それでも、彼女を少しでも違う場所に動かして、気を紛らわそうとした。

老婆にしろ、Mにしろ、この家には、男が知らない、女の裏の顔を併せ持つ、毒蝶のようなところがあ  
る。男もそれをどうにか改善したいが、なかなかうまくいきそうもない気がしてきた。というのも、この  
家はかなり古く、それにことは既に進んでおり、男の力で、全く別のものに変えることなど、到底できそ  
うもない、それこそ伝統のように成り果てていたからだ。

「映画…私しばらく行ってないわ…ずっと家にいたの…」と、彼女は最初に男に接したときのように、ま  
た語尾を濁す話し方をしていた。

「二階のMについてもこれから少しずつ考えよう。一遍に何かをしようとするとう達成できないんだ。わかる  
よね、それに、そう、おいそれと、きみの癖という言い方は、いいかわからないが、それを俺も手伝って、  
変えていこう…」

しかし、女は鼻で笑うのをこらえていた。男は不安になった。綱が切れ、落下し、全身を打って重体、そし  
て死亡したピエロ。

「そうだ、…酒でも飲もう、それがいい…」

腰を引いた言葉。男は盛んに、この家には、だめな気がして、説得しようとするが、黙って、笑みを浮  
かべる女を前にしては、もう何も効果をもたないことを悟った。

そこで、男は台所に向かい、包丁を研ごうと、研ぎ石を探した。女は台所のシンク下から研ぎ石を出した。  
「いつも、研ぎ屋さんに頼むの、よく来る研ぎ屋さんは包丁を、この辺の家々から集めて、十本くらいを並  
べて、路上で研ぐの、研いでもらうとすごく持つの…」

包丁を水で湿らして、既に研ぎ始めた男は、研ぐことに集中していて、彼女の話をおあまり聞いていなかっ  
た。

「え？」

「なんでもないわ、邪魔してごめんなさい」

女は、居間へ消えた。そこで、ソファに横になり、燃え尽き、石綿の上で白胡椒色した、蚊取り線香の灰  
をぼんやり、眺めていた。そうして、疲れを感じて、眠った。

台所の刃物を研ぐ音が、彼女の子供時代に父に連れられて行った浜辺を思い起こさせた。その浜辺で彼女は貝殻を擦り合わせて、波打ち際で演奏をしていた。そのときの音に似ていた。日傘を差した、母の姿。父はタバコを吸って…

女は、台所に行き、男に向かって、大きな声で言った。

「あなたタバコ吸わないの？」

すると、男は研ぎながら、

「そういえば、魚から変化してから、ずっと吸っていない」

女は財布を持ってタバコを買いにいった。

包丁を研ぎ終わり、男は居間に向かい、テレビの仕組みを調べ始めた。奇妙であった。なぜ、蚊取り線香で、電気が発生するのかが、分からなかった。

急な夕立で、勢いよく雨粒がこの家の屋根をたたきつける。彼女を迎えに行きあげなくてはならない。そこで、男は診察室を抜けて、待合室に入り、そこで傘を探し――待合室に骨の折れた、黒い傘が、傘立にあった――見つけて、外に出た。

外は白い飛沫のような雨が降り注いでいた。この黒い傘は骨が折れていたため、男が歩く姿は、傘を被った妖怪のようであった。これでは視界は開けない、彼女を見失ってしまう。そこで、諦めて彼女の家に戻り、タオルを用意し、それから風呂を沸かしておこうと思った。

スウェットのズボンが、洗濯しなくてはならないくらいに、ずぶ濡れであった。そこで、男は乾燥機に、それを入れ、スイッチを押した。単調な乾燥機の音、その熱風。夕立のため、今は湿気を帯びていたため、エアコンを除湿にした。

診察室から物音がして、髪をすっかり濡らし、上着も濡れた彼女は、タバコカートンを白いビニール袋に入れており、その袋は、雨粒で濡れていた。

「ひどい、土砂降りよ、風邪をひいてしまうわ…銘柄を聞き忘れていたから、マイルドセブンがいいんじゃないか、ってタバコ屋さんが言ったから、それ買って来たの」

男が差し出したタオルで髪を拭き、洋服をたたいて乾かしていた。

「ありがとう、今お風呂を沸かしているところだ、すまなかったね、少し前に迎えに行こうと外に出たんだよ、でもひどく視界が悪かったから、家で準備しておいたほうが、いいのではないかって、思ったから、家に戻った」

彼女はありがとうと言ひ、居間に行きましょうと歩き出した。

一服をし、彼女を見ると、またしても、奇妙なテレビを見ようとした。無邪気に、蚊取り線香に、コードの先端をつけるのに、一生懸命だった。女の姿を、男は微笑ましく眺める。その半面で、奴隷を飼うところが、男にとって謎であった。ちょうど、この今、夢中になってテレビの設定をしている状態で、彼女は奴隷を扱っているのであろう。

「もう、五時過ぎでしょ、ニュースを見たくても…こう湿気ちゃうとなかなか…つかないわね」

と、男から一カートン買うと付いてくるライターを取り上げると、

「ラジオでいいかしら？でも、ラジオって嫌いなもの…なんかこう…空気の中を電波が、蠢いていると思うと、脳によくないような気がするのよ、テレビの電波もそうなんだけれど…ラジオは何か、雨の時に聞いていると、悲しい通夜を思い出してしまうのよね。父の葬儀のときに、深夜に叔父が、離れでラジオを聞いていたわ…」

と言った。

男はラジオの昔話をしだした。だが彼女は耳を貸さずに、「お手伝いさんのことが好きだった叔父のことよ、もうだいぶ前のことになるけれど…私が大学のときよ、でも、その当時なんだか汚らしくて嫌だったの、だからラジオっていうと、叔父の顔が浮かんで、次にお手伝いさんの顔が浮かんで、離れが浮かんで、雨音がするのよ、そして田舎臭い音…」と言ってテレビ画面を見ていた。

男は、奴隷をいつから飼いだしたのかを聞いてみようか、と考えた。こうした極度にプライベートな質問に対しても、彼女はおそらく、きちんと真面目に答えてくれるのではないかと思ったからであった。

しかし、その質問をしようとして口を、男が動かす前に、彼女の手が下半身へ伸びて、下着を下ろされる。どう考えても、彼女は俺を露出狂の枠に入れているとしか言いようがない。

目は画面に、手は男に、器用なことができたものだ、こうして過ごしていつてしまうのであろうか。だとするなら、俺は二階の奴隷の二の舞に過ぎない。

そう考えると、男は不機嫌になって、女の手を払いのける。彼女が見つめる。部屋はもう暗く、顔の表情は、もう燃え尽きる線香が電力を、頼りなく送ることで、やっと保っているブラウン管の光で、どうにか判別できる程度になる。

女はどんな表情をしているのだろうか。

画面の光が消え去った。暗い、雨音のする、居間のエアコンの緑のセンサーランプが唯一の光源。いつのまにか、男の顔に女の顔が近づいている。女は唇を合わせようとする一方で、手が男に伸びてくる。これでは初心な少年が、性的誘惑を受けているようなものだ。完全に彼女の音頭取り。完璧な主導権への白紙委任状。

ふざけている。そう男は言ったところ、女は、何が？と、全く何も知らない小学生の女の子のような口の利き方をした。香水をいつの間にか、つけていた。いい匂い。

もう既に、下半身は何も纏っておらず、腹と鋭角を描いて伸びていた。女が跨ぐ。ふざけている。また、男が言った。

今度は女は何も言わず、彼女の表情が、一瞬の稲光りで見えた。夜叉だ。そう感じた。あの老婆の言ったように彼女は、老婆が何かを伝えようとして、伝えきれずに、作り話に終わったあの何か…それを男は次第に、薄ぼんやりであるが、感じ取りつつあった。

カんで放った水鉄砲。彼女はうまく避ける。脱力感の中、俺は、侵されているのではないかといった、疲れ果てた脳が送る信号。

こうして一週間がたった。下半身が痛み出していた。最初の興奮、ときめき、それは消え去り、苦痛すら感じるようになった。ことある毎に、彼女は、「新しいパーツ、アルジネイト…」と言う、確かに俺の体は新しい部分なのだろう。

あの食物をくださいと言ったMは、あれから音沙汰ない。彼女は彼に食事を与えたのであろうか。

台所は異臭を放っていた。一週間前のカレーのルー、アオカビが生え、小蠅が乱痴気騒ぎをしているように飛び交っていた。なかには交尾をしながら飛び交う、ランデブー小蠅、そいつを俺は憎たらしいくらいに思い、しつこく追いまわして、手のひらで叩き潰した。

彼女はもう既に俺に飽きがきたのか、要求してこなかった。二階に彼女がいることのほうが多かった。そんなときには、ときおり二階に忍び込んで、開かない扉の前で、俺は卑しく聞き耳を立てる。

中で何が行われているのか、俺はほんとうに不要になったのか、それならばこちらから出て行っても、一向にかまわない。

そうして、俺は、服というきわめて単純な布切れ一枚のせいで、この家に居つづけなくてはならない。彼女は相変わらず、俺に外出用の服を買ってきてくれなかった。なんていうことはない、雨でも降れば、こんなよれよれの創業1950年の老舗のスウェットスーツで外にいける。魚から変化し、丸裸であったことから考えれば、こんな格好は著しい進歩ではなからうか。

たまに食堂ですれ違う彼女、顔を合わすものの、笑顔は消え去った。食事もなく、男は半分腐ったバナナとミネラルウォーターで一日を過ごしたが、一日が限界であった。

ひどい下痢を起こし、正露丸を薬箱からどうにかせしめて、それで一日床についていた。それでも、俺の部屋には足音が近づいてきたりはしたものの、部屋にはこなかった。

見捨てられるのがこんなに情けないものか、つい一週間前までは見捨てられてもいい、と考えた俺でも、ぐるぐる言い出す腹を抱え、苦痛で顔が歪んでも、顔すら見せない彼女は、俺と一体どこで接点が切れてしまったのであろうか。彼女の内面には俺はとてもではないが付いて行けない気がした。

こう考えているときに、頃合を見計らってか、離れの老婆が、顔を出すようになったのは、十日過ぎのことだった。

「なんていうさまだよ、おまえさんは！馬鹿だね、だから私は言っただろうが、こうなるのは目に見えていたんだよ、まあ、一週間持ったのはいいじゃないかとは思うがね」

そして、老婆は、便所に立っていく俺の杖代わりにしてくれる。それまでは這って廊下を行ったものだった。

「お嬢様はね、サディストなのさ、真からのサディストなのさ、それを弁えていないと、おまえさんは二階の人とおんなじになってしまうんだ、こ汚い乞食は痛い目に遭わないと分からないんだらうかね」

便所に男を老婆は送ると、食堂の薬箱からか、離れからか、正露丸と、ミネラルウォーターを持って待っている。便所で苦しんでいると、老婆は、こう続けるのだった。

「あの二階では今、お嬢様は、おもちゃ遊びをなさっているんで、離れにも聞こえて来るんだよ、おまえさんのときとおんなじさ、それで、お前さんは放って置かれ、うんうん唸っているのも聞こえて来るんだよ、よそ様が聞いたら、いったい、どうなっているんだ、この家は！と思うに違いないとも」

便所から、男が出てくると同時に、正露丸を渡し、きめ細かに、時間を計ったかのように水を渡す。

「婆さんすまないね。俺は、こんなにだらしなく、弱く、情けない男に見えるだろうが…もとは破壊が好きで、喧嘩好きの男だったんだ…それが魚になってしまったから、いや、八百屋のせいか、あの女のせいか分からないが、とにかく、魚になってから、この体たらくさ」

と、腹を擦り、

「魚っていうのは妙で、俺も、そこのところを考えてみようと思っていたんだが、とにかく忙しかった。解剖されそうになったり、この家に来たりと、忙しかった…」

と、男が愚痴をこぼした。

すると、老婆はしかめっ面をして、

「なんなんだい、おまえさんが魚だったって？だとしたら、それに戻ったらいい、魚に戻って、私が、魚屋で一匹買おうじゃないか、へ、笑わせてくれるわい、戯言ぬかしよって、散々楽しんだわけだろうが…それが、お嬢様が興ざめしたとたんに、こんなになっちまって…」

と言い、老婆は自分の腹を擦り、首をくるくる振って真似をした。

男は、この老婆を叱りつけるわけにはいかなかった。老婆の罵倒はまだ続いた。

「野放図な性欲っていうのはお釣りがくるんだよ、それに飽きっていうもんが来る、お前さんをお嬢様が拾ったのは、お嬢様の気まぐれでしかないんだよ、それをおまえさんは舌をだらりと垂らして、いつまでもお嬢様にしがみついている、憐れだね、お嬢様が、おまえさんに、ぞっこんなことなどないんだよ、いいかげん目を覚ましな、いつだって、お嬢様は恋愛感情なんてもんはないんだ、下の口が疼くのさ、それで拾ってくる、そして飽きたら、また別の…てな具合で、永遠に、そうだね、私くらいか、そのくらいにでもなりゃ、落ち着くんじゃないだろうか、これまでお嬢様が連れこんだ男の数といったら、おまえさん驚きなさんなよ、」

と、老婆は言って両手をかざして、ゆらゆらさせ、

「星の数ほどってことだよ、数え切れない数さ、もし私が帳面にでも記帳してごらんよ、そりゃ、電話帳くらいの厚さになることだろうよ、お嬢様が自叙伝で自分の男性遍歴でも書きようものなら、そうだね、世の男はげっそりすることだろうよ、あいつは俺たちの白い魂を吸い尽くす悪魔だ、ってな感じさ、所帯持ちであろうと、当たり構わずあの女は奪い取る。そういう女なんだよ、二階の人にしたりももうそう長くはないことだろう、あの二階にいる奴は、最初はお嬢様と結婚でもするつもりでいたんじゃないのかね、それをあの女は逆手にとって、ぎゅうぎゅう締め付けて」

そう、老婆は言って、雑巾を絞る真似をしたが、男はまた便所に駆け込んで、その便所の戸に向かって、老婆は、大きな声で、まるで酒場ではしゃぐかのように、話し続け、

「とうとうあの棺桶さ、棺桶っていうのは音がしない部屋のことだよ、おまえさん二階に上がったんだから知っているんだろ、あのノブをまわしても開かないドアのある部屋だよ、あれは変な癖がなんかの拍子についたときに作ったんだよ、大工さんを頼んでね、その大工だって、その変な癖がなんかの拍子についたときの男の紹介さ、なんかの拍子っていうのは、数が多すぎてわかりゃしないからなんだよ、そのくせっていうやつは、それ、陰険で、暗い、地下室で行われそうな、秘密で日陰もんのすることさ」

老婆が言うと、便所から男が出てきた。

「だが、あんたは聞こえるって言ったじゃないか」

反論すると、老婆は、そんなことを言ったかい、と恍けるのであった。しかし、老婆の妄想は止まらない。「いいかい、よく聞くんだ、お嬢様のことは、この私が、よく知っておる、どんな癖がついたのか、どんな男を連れてきて、何をしたのか、歴史をみてきたんだ、この家の」

老婆が、そう言ったところで、男は、老婆の肩越しに、立つ女を見た。

女は開放的な笑みをたたえていた。その開放的な笑みが、男に不安を呼び起こした。男が、下を向いて、自室に入る前に老婆に指で気付かせ、振り向いた老婆は、急いで、離れに戻り、男は床についた。

部屋に女がやってきた。しばらく枕もとで座っていたのであるが、脚を崩してため息をついた、そして唾液を飲み込む咀嚼音を立てて、切り出した。

「二階の部屋を、もうじき明渡そうかと思っているのよ、それでいま二階の人に交渉している最中なの、どう思う？私とあなただけの世界を作るのよ、そう悪くない話でしょ、私といるのは苦痛？ねえ」と、女は返答を待った。

男は苦痛で顔をゆがめて、背を丸めた状態で布団の上で、もだえていた。

しかし、女はそれを腹痛で苦しんでいるのかと考えもしないで、ひたすら返答を待っていた。

「ねえ、返事くらいしてよ、どうなの、あの二階のやつを追い出すのよ、それで、…」

次の言葉を伝えようとしたときに、男は苦し紛れに言い放った。

「おもちゃ遊びなんだろ！所詮俺を、弄繰り回して、捨てる気なんだろ！」

「そんなことはないわよ、なんで、そんなに怒っているのよ、何がそんなに不安なのよ」

女は覗き込んで言う。

「腹が痛いんだ、それをきみは放っておいた。それで俺は砕け散ったんだ。せめて俺をこの家から出してくれ、それには服が必要だ、前にも言ったようにカジュアルな服をくれ、それと医者を呼んでくれ、これは正露丸でも止まらない痛さだ…」

と、脂汗をかいて、最後の方は呻き声のようになっていた。

「しかたないじゃないの、二階の人のことでもめていたんだから、正露丸があったでしょ！」

と、女は怒って、男に言った。

「老婆がくれたものだ！恵んでくれたものだ！」

便所に向かう。女は泣き出して布団に崩れていった。

医者が来た。内科医で、隣町からだという。

彼女は診察のときに薬瓶を持って座っていた。医者は聴診器を使い、それから触診をして、なにを食べたのか、と聞いた。男は腐ったバナナだと思う、と答えた。そして、医者は彼女から薬瓶を手にして、老眼鏡をかけ、顔を反るようにして説明書きを読んだ。

「あれ、これ変ですね、ラッパのマークじゃない。それに成分が違いますね。私などは子供のときに耳鼻咽喉科に行ったんですよ、そうしたら、先生は鼓膜が内側にへこんでいる、と診断をしましてね、鼻にゴムマリのようなもので空気を送るんです。そのときに先生は『ラーッパ』といって、ぼくも『ラーッパ』と大きい声でいうのです。それで空気を鼻から送る、そうして、凹みを無くすんです。それは小学校三年生までなんです。それ以降は大人の方法、鼻に金属の管を挿入して、それが今考えると、子供にとっては痛いものでした。それはそうと、それ、言ってごらんなさい、よーく効きますよ、それ、ラーッパ！それ、ラーッパ！…」

医者は大声で言った。彼女も負けじと大声で言う。俺も仕方なく、大声で言った。その奇妙な医者が注射をして帰ると、彼女は薬屋に行き、本物の正露丸を買ってきた。贋正露丸は庭先に捨てたという。

二日くらいだろうか、いつのまにか腹痛は治ってしまい、彼女と過ごす時間は先日から比べると長かった。

そんな折、休診札を彼女が取り去っていたとは知らなかった。だから、彼女が診察室にいて、白衣を着て患者を待っていることを俺は気付かなかった。彼女は診察椅子に腰掛けて、足を組んで目を閉じていた。いつ来るとも限らない患者を彼女は待ちつづけた。

俺は居間で即席ラーメンを食べて雑誌を読んでいた。休日ではないのに、休日のような、のどかな日だった。爪が伸びていたので爪切りを探し、小物入れから取り出すと、新聞紙を広げて足の爪を切っていた。

死んだ人は髪の毛も生えつづけ、つめも伸び、髭も伸びる。死んだ祖父がそうだった。祖母はそのころ元気で、床に横たわった死んだ祖父の爪を切っていた。それが二日後には火葬場に行くのだ。それなのに、最後の最後まで祖母は祖父の世話をしていた。

足の爪を切り終わり、新聞紙をたたんで切った爪をごみ箱に捨ててに行った。ごみ箱は食堂にあり、燃えるごみだろうと思い生ごみのほうに包んで落とした。診察室で声がした。

「初診の方ですね、ではこちらに記入してください」

彼女は問診表を手渡す。しばらく使われず、俺と彼女から発散した桃色の空気を吸った淫靡な問診表だ。患者は問診表を書き、彼女は事務的に準備をする。その様子を診察室に通じるドアをこっそり小さく開けて覗いていた。

患者はどこも悪そうもなく、ただ歯を掃除してください、とだけ言って、書き上げた問診表を渡した。

よりもよって、こんな廃業寸前の歯科医院を受診するとは、たいがいは彼女目当てなわけであろう。この変な患者、下心みえみえの患者をあっさり、あしらう彼女を予想していた。

しかし、彼女は患者に診察椅子に腰掛けるように促した。そうすると、患者は彼女のうなじをじっと、焦げるような視線を浴びせたのを、俺は見逃さなかった。あの男は、うなじに拘るのだろうか？

その患者を俺は想像の腕で捏ねまわし、殴り、蹴飛ばし、引っ叩いて、この歯科医院から追放したくなった。

ライトを彼女はつける。ここからではよく分からないが、安い合金の金冠だらけの歯のような気がした。「これから、デートですか？」

彼女が言って、俺は、なんということを言い出すのか、と驚いた。普通、このような話題は親しい人同士で話すものだ。なんということはない、俺は嫉妬していたのだ。

こうして、廊下に立ち、やぶ蚊に刺されながらも、患者の動き、視線、姿勢、そしてズボンの股あたりをしっかりと、獲物を追う、狩りをする動物のように見ていた。

患者は笑って、そうです、と答えた。ここで、ひと安心する。彼女目当てではないと。

彼女は患者の顔に、胸を押し付けるようにして、エプロンをつけた。ブルーのエプロンだが、あの患者には、象さんのマークが入った、赤ん坊の涎掛けでいいくらいだ。

彼女がまた覆い被さって、口に脱脂綿を入れた。患者は、だらだらと、しまりのない、唾液がその口を満たし始めた。唾液が溜まったのを、彼女はごく自然に見つけて、脱脂綿を取り換える。

「虫歯がありますが…」

彼女はミラーで、光を反射させ、歯を丹念に調べ、弾きだしていく。

「放っておいてかまいません。後日先生のところにまた来ますから」

と、意外と誠実な発音をさせて話した。

「ここもそうです。そうですね、一度にできませんから、徐々にやっていきましょう」

と、歯の掃除に取り掛かった。そして、患者は何事もなく帰って行った。

彼女はその患者だけを待っていたかのように、もう休診札をドアにかけた。俺は診察室に安心して入っていった。

「あの患者きみのうなじをいやらしい目をしてみていた、うなじだけではない、足も腰もあそこもみんな見ている気がする」

と、俺は子供のように彼女に訴える。彼女は驚いて、

「なーに、見ていたの？」と、返答し、

「あなたのも見ましようか？虫歯があるって言っていたじゃない？」

彼女は最近、言葉を濁さない。そういえば先ほどの患者に対しても、言葉を濁さなくなっていた。

「いいよ、いや…、いや、結構」

彼女は微笑んで、椅子に座るように手で合図を送り、ライトをつけた。

「治した方がいいわ、どんどん進行するものなのよ、それとも私の腕を信用していないのかしら？」

「いや、そんなわけじゃない。昔、神経を抜かれたときの近所のおばさんが、ひどく叫んで、痛い、痛い、ともんどりうっていたのを見たんだ、夕暮れ時で気味が悪かった。それからあまり、歯医者さんには行かない。よほど痛くなってからじゃないと」

「私、私が見るのよ、平気でしょ、ちょっとだけ…」

彼女の言葉で男はしぶしぶ診察椅子に腰掛けた。

「神経を抜くほどではないわ、大丈夫、簡単に治るわ、少し怖いでしょうけど、削るからね」

彼女が、素手で、口に侵入してきたので、彼女の指を吸った。彼女は、「もう」と言って、肩をたたいた。それから歯を削られ、プラモデルをこしらえるときの、接着剤の臭いがする、パテを塗られて、虫歯退治をした。

「また、新しいパーツになったわね、技巧士さんに注文して被せるから、一週間くらい必要ね、それと歯を掃除する？」

彼女は首を傾げて返事を待った。男はヤニで汚れているだろうから、そうして欲しいといった。そういうのも、また彼女の指に舌を絡めたかったからであった。

満ち溢れ、褪めた欲求は笑いをもたらすのだろうか、俺と彼女は下らぬ話をして、交わることはなくなっていた。そのことで少しは対等の立場を取ることができるようになった気がした。つまり、彼女が主導権を握り、俺を露出狂の枠に閉じ込め、彼女の思い描いた、求めていた男性像を強く要請してこなかったことは、喜ばしいかぎりであった。

Mについての話だけは、和んだ雰囲気の中でも、決して彼女の口からは寸分も漏らすことはなかった。Mについて深く知ろうとすれば、彼女の見せたくない一面を見ることになるだろう。

ただ、気になる、というものなのか、気に障る、というものなのか、Mよりも、つい最近この歯科医院を受診した、あの初診の男のほうが、頭を占拠していた。

彼女とラジオも聞かず、即席ラーメンを食べながら、例の、やぶ蚊取りを兼ねて、短時間の、蚊取り線香が消えると、寸断されるテレビを鑑賞をしているときでも、初診の男が癩に障ったままだ。

「あの初診の男を面倒みるのかい？」

「そうよ、虫歯が多いから治さないと、そのうち、だんだんひどくなって、腐ってしまうわ。それにどこで受診したのかわからないけれども、虫歯でない歯まで削っていたみたいだわ、気の毒に」

「この前きみはあの男が帰ってから、休診札をかけたね、あれはどういうことなんだい」

「あなたと一緒にいたかったからよ、歯科医は、お小遣い稼ぎ程度になってしまっているのよ」

と、爪を見ながら話をした。

「金はどうしている？遺産が転がり込んだのか？」

「少しだけね、だから生活には困らないの…」

「だから、俺みたいな奴を連れてきたりしているんだ」

彼女は何も答えず、居間から食堂に向かった。その後を付いて行った。

すると、彼女は、アオカビが生えている腐ったルーを見て、鍋を洗い始めた。

「どうも臭いがすると思ったら、これね」

女は顔をしかめて言い、男が隣に位置を取り、

「腐っているのはルーだけじゃないんだ、バナナも腐っている」

蒸れた臭い腐ったバナナの入っている白いビニール袋を女に手渡した。彼女は手際よく手渡された袋に、腐ったルーを新聞紙に包んで入れ、

「ちょっと捨ててくる、ゴミ屋さんまだ来ていないわよね」と言って、外に出た。

なんの洒落気もない、色気もない、ただ単に時刻だけを伝える壁掛け時計が、午前八時をさしていた。

彼女が帰って来ると、男は服を買いに行ってくれるか、と頼んだ、しかし、彼女は外に散歩に出るのだったら、今の格好でも別に違和感はないわ、もし自信がなかったら、私も一緒に付き合うけれど、と言った。

「そうだ、夏らしい格好をしたい、シャツと短パン、それにソールがごつごつしたブーツが欲しい、この辺にないのかな」

彼女は下を向いてしまった。彼女に、何をしたというのだろうか。彼女は、しばらく落ち込んだ表情をしていて、これではまだ俺をこの家に閉じ込めて、対等でない立場にしようと、いうのだろうか。腹痛は治ったわけだ、店に行くことぐらい簡単だ。

ただ、なぜかスウェットスーツでは、外に出られない、裸で歩いていたときにはそんな気は起こらなかったのだが、社会では服というものが、一つの連帯を生み出し、それから逃れたり、見劣りするものを排除してしまう。服というものは人間の警戒信号のスイッチを入れさせるための動機に成り果てるようだ。

なんのことはない、彼は黄色が好きだったのだ。服も黄色、ノートも黄色、クリアファイルも黄色、靴も黄色、帽子も黄色、財布も黄色、…黄色が警戒信号であることと彼の黄色に拘ることはそう短絡的に関連はしないように見えた。髪の毛を黄色に染めてみた。ネクタイも黄色にしてみた。そうこうしていくうちに部屋の壁も黄色にし、カーテンも黄色、テレビも黄色、電話も黄色、「イエローバード」を聞いていた。

友人の話では彼は小さいときに、黄色の車を見てから黄色が、彼の色だと決まった、決定打となったと言っているが、どうみてもおかしい。友人はその点、好奇心が強いので彼に接触しだし、黄色の秘密を彼から探ろうとした。そして、初めは外で会って、いろいろなところに行って、彼と親密になろうとした。

そうすると、今度は互いの家を訪問しだす。そして、話を聞いているうちに、黄色の秘密がわかった。その秘密というのは、彼には黄色の服を着た双子の看護婦が見えるというのだ。ほら、そこにいるでしょ、といって友人に指し示すが、友人には見えない、それで友人は見えないというと、彼は怒り出し、もうそういう人とは付き合いたくない、といって別れたのだそうだ。

しかし、話はそこでは終わらない。友人の部屋に一本のひまわりが送られてきた。それを契機に友人は黄色に冒された。ミイラ取りがミイラになったのだ。彼の警戒色は毒を持っていたのであった。

「何を思いつめているのか分からないけれど、俺がそんな無理難題を吹っつけたか？」

彼女は顔を上げた。

「いいえ、…そんなことはないわ。ただ、そう、そんなに私の家にいることが嫌なのかなと思って、外に行きたい外に行きたい、というんですもの…」

「きみにはなんか、引っかかるというか、外に出すのを拒んでいるように思えるんだ。この家の秘密など公言はしないし、それに、第一俺はこのあたりに住んでいないんだ。知り合いをつくられると困るというのなら、外であった女の人が、にこやかに、『おはようございます』と大きな声で言っても無視して、口をしっかりと閉めて、そう、こうやって、—できるかぎりの演技はしてみた—だから、そうだな、とりあえず、一緒に外にいけるだけのレベルの服が欲しい。きみがスーツを着るのなら、俺もスーツが欲しい。同等の服で嫌ならば、」

ここで彼女は切り込んできた。

「じゃ、なに？私があなたにろくに満足な服を与えないで、この家に閉じ込めておくとも言うの？」

「違う、そうとれる、といたいんだ。わからないかな、だから、服を用意してくれるだけでいいんだ、で、できない、どうしてもできないならば、その理由を知りたいんだ」

「わかったわ」

彼女はそう言って、財布を持ち、外に出て行った。男は、なぜ彼女が服を用意しないのかを考えてみたものの、結局は俺を露出狂の枠に閉じ込めるためだとしか言いようがなかった。

服を彼女が買ってくる間に、時間がかかりそうなため、男は何をしようかと思い始めた矢先に、休診札を掲げているにもかかわらず、待合室のドアを叩く音がした。

そこで待合室に向かい、ドアを開いた。すると、あの初診の男が立っていた。

「休診とありますが、いったい何時ならやっているのでしょうか。この歯科医院では休診がやたらと多く、実際診察などしておられるのか、と思ひましてね、思い切ってドアを叩いたのですが、あなたは旦那さんでしょうか？」

帽子を取り去り、礼儀正しく尋ねた。

「旦那でなく、恋人だ」

「ああ、で、先生は、いらっしゃるのでしょうか。できれば、診察をしていただきたく思ひましてね。いらっしゃいますか？」

「いない、この歯科医院は、ほとんどやらないんだ、他の歯医者を探したほうがいい」

と、つけんどんに答えた。

「では待たせていただきます」

と言い、待合室に入り込もうとした。

しかし、ドアをほとんど立ち塞がるかのように男は立っていたため、初診の男は隙間を狙って、どうにか潜ろうとする。意地悪なことに、その隙間を、手を伸ばして、入れないように、邪魔をした。

「すみません、ちょっと通してくれませんか」

「いや、いないと言ったはずだ、今日は診察はしない」

と語気を強めにして言った。

「恋人を取られる心配をしていらっしゃるのでしょうか」

と、額に汗をかき、それをハンカチで拭きながら言った。

「いや、違う、さっきも言ったように、診察は決まっていないし、今日は診察をしないと言ったじゃないか！」

「ですが、虫歯がひどくなったようで、痛いのです、待たせていただけないでしょうか」

と懇願するように言った。

男はそれがなぜなのか分からない、普通こうまでして拒否されたら根負けをして速やかに退散することだろうに、この初診の男はいつまでたっても、低姿勢で、丁寧で、穏やかだ。年齢からいえば、頭髪の薄さからいえば、俺のほうが若い、それなのに、この男は、腹を立てずに、頼んでいる。

この男なら、彼女に対して献身的な行動、行為をすることだろう。だとするならば、その献身さが仇となって、二階に住む奴隷Mの二番煎じをこの男はやらかすというものだ。だとするなら、滑稽だ。

その点、俺は彼女の奴隷にはなっていない。その証拠に、たった今彼女を買い物に行かせたし、関係も持っている。それも一週間もだ。それに腹痛という、ちょっとした出来事に対しても乗り越えてきたわけであり、彼女との人間関係についても濃密になっているからだ。

ねずみ魚（下）につづく